研究ノート

過去 5 年間のリアリティショック研究における リアリティショックの概念定義と捉える手法

松浦 美晴[1)]

Miharu Matsuura

キーワード：リアリティショック，専門職者，研究手法
Keywords：reality shock, professionals, research method

問題と目的

厚生労働省（2013）の「待機児童解消加速化プラン」では，「新人保育士を対象とした離職防止のための研修」として，「就職前の期待と現実とのギャップ（リアリティショック）への対応方法」の研修が必要だとされている。

リアリティショック（以下、RS）の定義として，，Hall（1976）の「高い期待と職務上経験するフラストレーションとの衝突」，Schein（1978）の「組織での仕事・組織に所属することについての期待・現実感のギャップ」，Dean, Ferris and Konstans（1988）の「組織参入前に抱く仕事上の期待と組織の一員となってからの経験との不一致」などが知られる。

看護分野では，1986 年に雑誌『看護展望』で特集されたことが一つのきっかけとなり，RS 研究が行われるようになった。この特集では，Kramer（1974）による定義「新卒の専門職者が就職後数か月以内に予期しなかった苦痛や不快さを伴う現実に出くわし，身体的，心理的，社会的なショック症状を表わす状態」が紹介され，また宗像（1986）により「実際に職場で仕事を始めるようになって予期せぬ苦痛や不快さを伴う現実に出くわして，身体的・心理的・社会的にさまざまなショック症状を表す現象」という定義がなされた。 糸嶺（2013）によれば，新卒看護師の RS に焦点を当てた看護研究論文は 2000 年前後で急激に増加し，さらに 2007 年にもピークが見られ，その後は一定数の研究がなされてきたとされる。

看護職者の RS 研究について，いくつかのレビューがなされている。 武藤（1999）は，「「何をもって RS と捉えているかを知るために」，過去 20 年間の看護文文献において扱われた RS の概念と測定法を整理した。その結果，RS の概念は「現象・症状」と「要因」から構成されていること，「要因」によって RS の「現象・症状」が起こり，その度合いも違ってくることを見出し，RS は「新人看護師が実際に職場で仕事をしたときに様々な要因によって感じる現象や症状」であると考えた。

石倉・林・井村・濱口（2016）は，2000 年から 2014 年までの間に発表された，新人看護師を対

1) 山陽学園大学総合人間学部生活心理学科

象とした看護研究で用いられた RS の測定尺度を整理し，尺度別にの捉え方と測定法の変遷を調べた。ここで石倉らは，新卒看護師の RS 研究において，武藤（1999）の述べた「要因」「現象・症状」がどのように扱われているかを検討している。その結果，「要因」と「現象・症状」を区別した研究では，RS を捉える尺度と，バーンアウト尺度または GHQ（精神健康調査票）との組み合わせで RS を測定したものが多かったとした。そうした研究として石倉らは，RS 研究にストレス理論の枠組みを持ち込んだ水田の研究を紹介している。水田（2004）は，Lazarus のストレス・コーピング理論を研究枠組みとして用い，Kramer の RS における定義の「予期せぬ苦痛や不快さを伴う現実」をストレス刺激ととらえ，刺激への認知評価と対処の結果，ストレス反応としての「ショック反応」が生じるとした。刺激を測定するため，予期せぬ苦痛の内容項目について感じている程度の評定を求める質問紙を作成し，ショック反応の測定には GHQ を用いた。

ところで石倉・林・井村・濱口（2016）によれば，Kramer（1974）の定義は RS を「まだ準備できていないと感じる新卒専門職者の現象や特定のショック反応を表す」と表現しており，そこでは「まだ準備できていないと感じる新卒専門職者の現象」と「特定のショック反応」が並立に扱っわれているという。そして Kramer の定義をそのまま用いた研究は「 要因」と「現象・症状」を区別せずに RS を捉えていたという。

以上のように，RS 研究における概念の定義や測定方法は，研究によって様々である。本研究では，看護分野に限定せず，最近の RS 研究の文献を分類し，私用されている概念定義と捉え方を整理する。

方法

文献の検索

RS 研究についての文献を， 国立情報学研究所の文献データベース CiNii（NII 学術情報ナビゲータ）を用いて検索した。2017 年 12 月 13 日に検索を行った。キーワードとして「リアリティショック」を用い，発表期間を 2013 年から 2017 年までの 5 年間とし，「本文あり」の設定で検索した。ヒットした 64 件のうち，何らかの形で RS をデータとして捉え研究しているもの 26 件を抽出した。なお，キーワードを「リアリティ・ショック」に変えても検索結果は同じであった。

文献で扱われている職種の内訳は，看護師 8 件，大学生 5 件，教師 3 件，企業人（女性総合職）1 件，教育実習生 1 件，高校生（福祉科）1 件，障がい者 1 件，中小企業診断士 1 件，保育士 1 件，保健師 1 件，養護教諭 1 件，理学療法士 1 件，臨床心理職者 1 件であった。

分類の枠組み

以下の枠組みを用いて文献を分類した。RS の定義：どの提唱者のどのような定義を用いているかによって分類した。捉えようとする RS の内容：RS の概念は「現象・症状」と「要因」から構成されているという，武藤（1999）の説に基づく。捉えようとする対象が，「要因」「症状」のどちらなのか，あるいはその両方なのかによって分類した。捉える手法：RS の「要因」「症状」をどのような手法で捉えているかによって分類した。

RS の内容のうち「要因と「症状」のどれをどのような手法で捉えるのかは，RS の「定義」に沿って決まると考えられる。そこで，「捉えようとする RS の内容」「捉える手法」については，「定義」とのクロス集計を行い，定義に沿っているかどうかを検討した。

結果

RS の定義

用いられていた RS の定義を件数と職種の内訳とともに表 1 に示す。

表 1　用いられていた RS の定義

提唱者	定義の内容　※要因に相当する部分に下線，症状に相当する部分に二重下線	件数	扱う職種
Schein（1978）	組織での仕事・組織に所属することについての期待・現実感のギャップ	8 件	教師 2 件，保育士，大学生，企業人，教育実習生，中小企業診断士，障がい者各 1 件
Kramer（1974）	「新卒の専門職者が就職後数か月以内に予期しなかった苦痛や不快さを伴う現実に出くわし，身体的，心理的，社会的なショック症状を表わす状態」	7 件	看護師 6 件，臨床心理職者 1 件
半澤（2007）学業 RS	「入学前に抱いていた大学における学業イメージや期待と，大学入学後に経験している学業との間の，現在におけるズレによって生じた否定的な違和感」	3 件（半澤自身によるもの 2 件を含む）	大学生 3 件
『経営学大辞典　第 2 版』（1999）	「人生やキャリアの移行期において，新たな現実に戸惑ったり，驚いたり，がっかりしたりすること」	1 件	高校生（福祉科）1 件
杉原（2012）	「大学卒業時までに学んできたことと学校現場の実情との間のギャップに耐えられないこと」	1 件	養護教諭 1 件
独自の定義　大学生活に対する RS	「大学入学前の大学生 活に対する期待と入学後 の実際の大学生活のずれから生じる違和感」	1 件	大学生 1 件
独自の定義　新卒看護師のプリセプターから見たプリセプティの RS	就職後臨床においてプリセプティが描いていた看護の理想と現実との間にギャップを感じ身体的，精神的，社会的に生じる現象	1 件	看護師 1 件
その他，1 つに絞らず複数の定義を並べたもの 1 件，定義の記述のないもの 3 件			

Schein（1978）が最も多く 8 件であり，Kramer（1974）が 7 件と続いた。半澤（2007）は 3 件であったがここには半澤自身による研究 2 件を含む。『経営学大辞典　第 2 版』（1999）と杉原（2012）がそれぞれ 1 件，先行研究をふまえて独自の定義を述べたものが 2 件あり，その 1 つは「大学生活に対する RS」，もう 1 つは「新卒看護師のプリセプターから見たプリセプティの RS」であった。その他，1 つに絞らず複数の定義を並べたものが 1 件，定義の記述のないものが 3 件であった。

定義のうち，要因を期待と現実の間の「ギャップ」または「ずれ」とするのは，Schein（1978），半澤（2007），杉原（2012），そして 2 件の独自の定義であった。要因を「新たな現実」とするのは，

Kramer（1974）と『経営学大辞典　第 2 版』（1999）であった。Schein（1978）の定義は症状に相当する内容を含まないが，他の定義は要因と症状のそれぞれに相当する内容を両方含んでいた。

捉えようとする RS の内容と定義とのクロス集計

捉えようとする RS の内容と定義とのクロス集計を表 2 に示す。

表 2　捉えようとする RS の内容と定義とのクロス集計

定義が含む対象	定義の提唱者	捉えようとする対象				
		要因のみ	要因と症状をともに質的に捉える	要因に加えて症状を別尺度で測定	要因と症状をともに一つの尺度で測定	症状のみ
要因のみを含む定義	Schein（1978）	4	2	1	1	
要因と症状の両方を含む定義	Kramer（1974）	4	2			1
	『経営学大辞典　第 2 版』（1999）	1				
	半澤（2007）学業 RS	3				
	杉原（2012）			1		
	独自の定義　大学生活に対する RS	1				
	独自の定義　新卒看護師のプリセプターから見たプリセプティの RS				1	
複数の定義を紹介		2				
定義記述なし		2				

捉えようとする RS の内容は，「要因のみ」を捉えたものが 17 件と最も多かった。要因と症状を区別せず質的に捉えようとする「要因と症状をともに質的に捉える」は 4 件であった。要因とは別に「ストレス反応」を評定尺度を用いて捉えようとする「要因に加えて症状を別尺度で測定」は 2 件であった。一つの評定尺度中に要因を表す項目と症状を表す項目を含める「要因と症状をともに一つの尺度で測定」は 2 件であった。「症状のみ」を捉えたものは 1 件であった。

RS を捉える手法と定義とのクロス集計

RS を捉える手法と定義とのクロス集計を表 3 に示す。

表 3　RS を捉える手法と定義とのクロス集計

定義における要因	定義の提唱者	捉える手法				
		質的研究	ギャップの評定得点	期待の回想と現実との差分得点	内容のあてはまり評定得点	バーンアウト得点
期待と現実のギャップ	Schein（1978）	3	3	1	1	
	半澤（2007）学業 RS	2	1			
	杉原（2012）		1			
	独自の定義　大学生活に対する RS			1		
	独自の定義　新卒看護師のプリセプターから見たプリセプティの RS		3			
新たな現実	Kramer（1974）	3	2		1	1
	『経営学大辞典　第 2 版』（1999）	1				
複数の定義を紹介		1				
定義記述なし		2	1			

捉える手法は，「質的研究」が最も多く 12 件であった。続いて期待と現実の間のギャップの程度を評定するよう求める「ギャップの評定得点」が 11 件であった。過去に抱いていた期待と経験した現実を別々に評定するよう求めた後 2 つの評定点の差分を算出する「期待の回想と現実との差分得点」は 2 件であった。用意された項目の内容に経験した現実が当てはまる程度を評定するよう求める「内容のあてはまり評定得点」は 2 件であった。バーンアウト尺度を用いて症状としてのバーンアウトを測定する「バーンアウト得点」が 1 件であった。なお，RS の測定の併存的妥当性の検討のためにバーンアウト尺度を用いる，RS との関連を検討する他変数の 1 つとしてバーンアウトを捉え

る，等の目的でバーンアウトを測定したものもあったが，表には含めていない。

考察

RS の定義について

本研究が分類した近年の RS 研究の文献において最も多く用いられた RS の定義は，Schein（1978）の「組織での仕事・組織に所属することについての期待・現実感のギャップ」であった。この定義の特徴は，RS の「要因」のみを含み，「症状」を含まない点である。この定義は，教師，保育士，大学生，障がい者のほか，企業人の研究や中小企業診断士の研究で用いられていた。組織行動論の研究領域では RS は新人の組織コミットメントにネガティブな影響を与える問題として扱われている（尾形，2012）。厚生労働省（2006)が労働者の心の健康の保持促進のための指針を作成したように，個々の労働者のメンタルヘルスの保持が問題となっているものの，ビジネスの領域では，本人に生じる症状より組織に影響を与える要因としての側面に焦点を当てる必要が生じるのかもしれない。

次に多く用いられた定義は，Kramer（1974）の「新卒の専門職者が就職後数か月以内に予期しなかった苦痛や不快さを伴う現実に出くわし，身体的，心理的，社会的なショック症状を表わす状態」であった。既に述べたように看護研究分野で RS への認識が広まるきっかけとなったのが Kramer の研究であり，そのことを反映してか 7 件中 6 件が看護師についての研究であった。

大学生，福祉科の高校生，養護教諭，看護師についての研究で，それぞれの職種や社会的属性に合わせた定義が用いられていた。Schein（1978）の定義では RS は組織での仕事において生じるとされ，また Kramer の定義では RS に陥るのは専門職者であるとされる大学生や高校生における RS を扱うためには，Schein や Kramer とは別の定義が必要であったと考えられる。

捉えようとする RS の内容は定義に沿ったものか

データとして「要因と「症状」のどれを捉えるかは，定義によって決められるはずである。クロス集計の結果，要因のみを含む Schein（1978）の定義を用いた研究では，捉える内容を「要因のみ」とする研究だけでなく，「要因と症状をともに質的に捉える」「要因に加えて症状を別尺度で測定」「要因と症状をともに一つの尺度で測定」とする研究があった。しかし，要因としての RS がもたらす問題を検討するために症状を測定することはありうることである。

一方，「要因」と「症状」を含む Schein 以外の定義において，「要因のみ」を捉える内容としたものは 9 件であった。これらは定義に含まれる「症状」を捉えようとしていない点で，定義に沿っていない可能性がある。

また，Kramer(1974）の定義を用いた研究で「症状のみ」を捉える内容としたものが 1 件あった。これは定義に含まれる「要因」を捉えようとしていない点で，定義に沿っていない可能性がある。

RS を捉える手法は定義にそったものか

RS を捉える手法もまた，定義によって決められるはずである。要因を捉えようとする場合，それが「期待と現実のギャップ」と定義されていればギャップとして捉えることになり，「新たな現実」と定義されていれば出くわした新たな現実を捉えることになる。クロス集計の結果，「期待と現実のギャップ」と定義される要因を「内容のあてはまり評定得点」として捉えたものが 1 件あった。これは定義に含まれる「ギャップ」を捉えようとしていない点で，定義に沿っていない可能性がある。逆に「新たな現実」と定義される要因を「ギャップ」として捉えたものが 2 件であった。定義されていない「ギャップ」を捉えようとする点で，定義に沿っていない可能性がある。

バーンアウト得点を用いた 1 件は，既述の，「症状のみ」を捉えようとしたものであった。

ギャップを捉える手法について

ギャップを捉える手法として，「ギャップの評定得点」「期待の回想と現実との差分得点」の 2 つがあった。この 2 つが捉えるものは異なると考えられる。

岡本・岩永（2015）によれば，主観的なギャップの認知は認知的不整合，すなわち，「自分の経験した状況・刺激が予測とは異なるために，予測や構えが崩壊することで不安が喚起される状態」（Epstain, 1972）となって RS の症状を引き起こすとされる。

一方，差分得点は，過去の期待と現実が同じでなかったということを示すものである。そのことが主観的に認知され，認知的不整合を引き起こす場合もあれば，ギャップとしてではなく，現在向き合う現実への適応の問題として捉えられる場合もあると考えられる。しかし，千島・水野（2015）は，差分得点からは主観的なギャップの認知，すなわち，ギャップを回答者自身が実感しているかどうかをらえることはできないと指摘する。差分得点からは，認知的不整合と現実への適応のどちらの問題として捉えるべきかを判断できない可能性がある。

ストレス・コーピング理論（Lazarus & Folkman, 1984）の枠組みでそれぞれに必要な対処を考えるならば，認知的不整合に対しては，引き起こされた不安への情動焦点型対処や認知的不整合を解消する認知的対処が必要とされるであろう。現実への適応の問題に対しては，問題焦点型の対処や具体的行動としての対処がより求められるであろう。RS への対処を考えるときは，捉える際に用いた手法を考慮する必要がある。

結論

本研究では，最近の RS 研究の文献を分類し，それらが用いる RS の概念定義とデータとしての捉え方を整理した。「捉えようとする RS の内容」「捉える手法」については，「RS の定義」とのクロス集計を行い，定義に沿っているかどうかを検討した。次の結果を得た。

1. Schein（1978）の RS の定義が最も多く用いられ，Kramer（1978）の定義が続いた。
2. 利あり手ショックの定義の多くは内容として「要因」「症状」を含むが，Schein の定義は「症状」を含まない。
3. Kramer の定義は看護師の RS 研究において多く用いられていた。
4. クロス集計の結果，RS の「要因」と「症状」の両方を含む定義を用いながら一方しか捉えていない研究があった。また，RS の要因として「ギャップ」を定義しながらギャップを捉えていない研究，要因として「ギャップ」を定義していないにもかかわらずギャップを捉えた研究があった。つまり，いくつかの研究においては，捉えようとする RS の内容や，捉える手法が，RS の定義と一致していなかった。
5. RS を引き起こす期待と現実とのギャップの測定には，期待と現実を別に評定し差分を求める手法と，ギャップの認知評定による手法がある。2 つの手法が捉えるものは異なると考えられ，注意が必要である。

文献

千島雄太・水野雅之（2015）. 入学前の大学生活への期待と入学後の現実が大学適応に及ぼす影響―文系学部の新入生を対象として― 教育学研究，*63*, 228-241.

Dean, R.A., Ferris, K. R. & Konstans, C. (1988). Occupatinal reality shock and

organizational commitment: evidence from the accounting profession, *Accounting Organizations and Society*, *13*, 235-250.

Epstein,S. (1972). The nature of anxiety with emphasis upon its relationship to expectancy. In C.D.Spielberger(Ed.), *Anxiety:current trends in theory and reserch, (II)*, New York: Academic Press, pp.291-337.

Hall, D. T. (1976). *Careers in Organizations*, Goodyear Publishing.

半澤 礼之 (2007). 大学生における「学業に対するリアリティショック」尺度の作成 キャリア教育研究, *25*, 15-24.

厚生労働省 (2013). 保育を支える保育士の確保に向けた総合的取組 http://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-11907000-Koyoukintoujidoukateikyoku-Hoikuka/0000026218.pdf 2013 年 10 月 16 日（最終アクセス：2018 年 1 月 26 日）

石倉夏海・林 智子・井村香積・濵口幸美 (2016). 新人看護師のリアリティショックに関する文献レビュー 三重看護学誌, *18*, 7-14.

糸嶺一郎 (2013). 新卒看護師のリアリティショックに関する研究の動向と課題 / 過去 20 年の文献から 茨城県立医療大学紀要, *18*, 1-13.

Kramer, M. (1974). *Reality Shock: Why Nurses Leave Nursing?* The C.V. Mosby Co.

Lazarus, R. S. & Folkman, S. (1984). *Stress, appraisal amd coping.* New York: Springer.

水田真由美 (2004). 新卒看護師の職場適応に関する研究：－リアリティショックと回復に影響する要因－ 日本看護研究学会雑誌, *27*, 91-99.

宗像恒次 (1986). リアリティショック —精神衛生学の視点から— 看護展望, *11*, 562-567.

武藤協子 (1999). 日本における「リアリティショック」の概念の明確化-過去 20 年間の看護文献を対象として- 神奈川県立看護教育大学校看護教育研究集録, *24*, 64-71.

岡本響子・岩永誠（2015）. 新人看護師のリアリティショック尺度の開発 インターナショナル nursing care research, *14*, 1-10.

尾形真実哉 (2012). リアリティ・ショック（reality shock）の概念整理 甲南経営研究, *53*, 85-126.

Schein, E. H. (1978). *Career Dynamics: Matching Individual and Organizational Needs,* Addison-Wesley.（二村敏子・三善勝代 訳 (2003). キャリア・ダイナミクス 白桃書房.）

杉原真晃 (2012). 新人教員の苦悩に対して教員養成には何ができるか ：リアリティ・ショックを想定した教員養成のあり方 山形大学大学院教育実践研究科年報, *3*, 40-50.

付記

本研究は，科学研究費助成事業 挑戦的萌芽研究（平成 27 年度～平成 29 年度 課題番号 15K13152）「保育士のリアリティショックの測定尺度開発と早期退職を防ぐプログラムの提案」，および，山陽学園大学・山陽学園短期大学学内研究補助（平成 29 年度）の助成を受けた。